

(協同学習) 「つながり合い 共に高め合える 集団づくり」  
—ピア・サポートの理念を生かした協同学習を通して—

大阪市立住吉小学校 研究推進委員会

1 はじめに

本校では昨年度よりピア・サポートの理念を踏まえ、日々の授業において子どもたちが互いの違いを認め、受け入れながら、主体的に学習を進めていくことができる集団づくりを目標として、実践を重ねてきた。その結果、グループ学習における話し合いの充実や、異学年との交流における適切なかわり方を身に付けるなどの成果が見られた。しかし、よりよい人間関係を形成するための集団づくりという視点での成果は見られたものの、それが日々の学習の場面でも生かされ、共に学習課題を解決しようとする集団として育っているかどうかについての検証は不十分であった。また、日々の授業においても、協同的に学ぶことがグループ活動をするにとどまっていたという課題もある。そこで、学習の場面でも共に高め合うことができるような集団を目指し研究を進めることにした。つまり、互いに交流し合いながら共に課題を解決することで、確かに幅広い知識の習得や、主体的で自律的な学びを実現することのできる学習を展開することを目指し、それを実現するために「協同学習」を取り上げた。

2 研究の内容

グループ学習そのものが協同学習ではないという立場のもと、子どもが学び合い・高め合い・認め合い・励まし合うような学習活動の展開をめざして、場設定や支援のあり方について探っていくことを研究の内容とした。学習活動が単なるグループ活動にとどまらず、「協同学習」であるためには、考えられる条件がいくつか挙げられる。これらの具体的な条件を満たすことによって、本校の目指すべき「協同学習」を実現することができると考え、以下の授業における3つの場面において、指導の工夫や支援を行った。

(1) 課題設定の工夫

- 教科・領域の目標と照らし合わせて課題を設定する。
- 子どもの問題意識を喚起する課題の吟味
  - ・適度な困難性を想定した課題の設定
  - ・活動や考えの広がりや深まりが期待される課題の設定

(2) 協同的な学びにつながる交流の場の工夫

- 自分の考えをもつ時間の保障（一人で考える時間の確保）
- ペアやグループ編成の工夫（何人のグループをどのようなメンバー構成で）
- 学びに対して責任をもたせる
  - ・自分の学びがメンバーの学びに役立つ
  - ・グループの他のメンバー一人一人の学びに対しても責任をもつ

(3) 成長を自覚したり、達成感や満足感を感じたりできる振り返りの場面

- 自分自身の活動や考えの変容を自覚
- 友達と交流することのよさの実感

3 実践事例

(1) 第2学年 算数科「かけ算（1）」

協同学習としての視点

- ・学級みんなが課題を解決することを目指し、友だちと教え合ったり、意見を聞いたりすることにより、互いの力を伸ばすことができるようにする。

#### 指導の工夫

- ・子どもたち同士が教え合いながら課題解決に向けて学習を進めていく「学び合い」を取り入れ、一人で学ぶ→教え合い→伝え合いという時間で区切り、個人思考と集団思考の時間を確保した。

#### (2) 第3学年 理科「風やゴムのはたらき」

##### 協同学習としての視点

- ・自分の実験結果と友だちの実験結果を比較しながら考察し、結論を導き出すことができる。

##### 指導の工夫

- ・子どもたちが主体的に学習に取り組めるように、課題解決の予想は一人一人で行い、実験から結果のまとめ、考察から結論を導き出す話し合い活動はグループで行うようにした。

#### (3) 第5学年 社会科「自然条件と人々の暮らし」

##### 協同学習としての視点

- ・自分の考えをもち、友だちに分かるように伝えることができる。
- ・互いの考えを認め合い自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

##### 指導の工夫

- ・子どもの思考を揺さぶる課題設定や発問の仕方を工夫し、追究意欲をもって調べることができるようにした。まずは個人思考の時間を取り、そこから集団思考において思考ツールを活用し、互いの考えを可視化することで比較・関連付けができるようにした。

#### 4 研究のまとめ

子どもたちが主体的・協同的に学び合い、共に高め合えるような集団づくりを実現するための「協同学習」のあり方について、授業実践を通して検証を進めてきた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

まずは成果として、協同学習として成立させるための条件を考え、学習場面（課題設定・意見交流・振り返り）における工夫をしたことで、子どもたちの相互協力作用が見られた。協力することで次のステップに進める仕組みや、グループ内での役割分担、一人では達成できない過大な要求を出すなどの工夫をすることで、互いの成功を促進するための仲間の学習への努力を援助したり励ましたりすることにつながった。これらは前提として、一人一人が個人としての学びに責任をもつことにもつながり、自分自身と仲間の学びに責任をもつという協同学習の条件を満たすことにつながった。こういった相互協力関係を成立させるためには、必然的に自分の考えを友だちに分かりやすく伝えたり、友だちの考えに耳を傾け理解しようと努力したりする姿勢が必要となる。その中で社会的技能や対人技能というものを身に付けることにもつながるということがわかった。

今後の課題としては、よりよい協同学習に子どもたち自身が改善をしていくことができるためにも、協同する上でよかった点、改善すべき点を子どもたち同士が話し合い、評価するような相互評価の場面が必要であったことが挙げられる。他にも、子どもたちが自らの学びに責任をもって取り組んだ、個人としての貢献度や学習の成果を自己評価させることで、学習に対する手応えを実感したり、自らの学びに使命感をもって取り組んだりすることにつながっていくと考える。そういった、振り返りや評価のあり方について、さらに実践を通して、研究を進めていく必要がある。